銀パン～501戦闘航空団に白夜叉がやって来た場合～

岸　劉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀パン～５０１戦闘航空団に白夜叉がやって来た場合～

【Ｎコード】
Ｎ４８８５Ｙ

【作者名】
岸　劉生

【あらすじ】
白夜叉、ストパンに降臨する。
かの攘夷戦争で伝説的な武功を立てた侍――――坂田銀時。
彼は攘夷戦争中に行方不明になり、死んだものとされていた。
だが、実は彼はストパン世界にトリップしていたのであった。
未知なる敵“ネウロイ”を相手に、銀さんが大暴れ。

もちろん、ストライクウィッチーズの皆さんとも交流します。

第0章　銀髪の男、現る

黒く淀んだ空の下では、異形の者たちが多くの屍を踏み散らして、二人の侍をグルリと取り囲んでいた。多くの烏たちが不気味な声を上げながら屍の肉を食らい、空を縦横無尽に飛び交っていた。

そこで黒髪長髪の端正な顔つきの男が、手にした血に染まる日本刀を地面に突き刺しながら、

「・・・・・ここまでか。敵の手にかかるより最後は武士らしく、潔く腹を切って死のうではないか」

と、背を向き合って対峙する銀髪の男に声をかけた。

使い古した鎧は血に塗れており、所々金具が錆びていた。刀も刃こぼれしており、並の使い手でない限り敵を斬ることは敵わないだろうが、この二人は違う。

数多の敵を斬って斬って、この死地を切り抜けてきた猛者である。だが、もう精根尽き果てたのか、男たちはハァハァと荒く息を吐きながらも、自分を取り囲む数多の敵を睨み付ける。

「・・・・・・馬鹿野郎。何寝ぼけたこと言ってんだ、立て」

すると、今まで沈黙を貫いていた銀髪の男が口を開いた。

跪いていた足を起こし、ゆっくりと立ち上がりながら地面にさした刀をゆっくりと引き抜く。

「・・・・・・銀時」

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」

血に染まった白い衣を翻しながら、敵を真っ直ぐに見据え歩き出す。

桂はそんな銀時の言葉を聞きながらフッと笑みをこぼし、地面に突き刺した刀の柄に手を伸ばし、それをゆっくりと引き抜く。お互い独自の構えで刀を構えると、

「行くぜ、ヅラ」

「ヅラじゃない、桂だ」

その声を合図に二人の侍は勢いよくかけ出した。

「ウォォォォォォォォォ！！」

「オォォォォォォォ！！」

その男。

銀色の髪に血を浴び、

戦場を駆る姿は、

まさしく『夜叉』。

銀時は飛び交う弾丸を紙一重で避けながら、異形の者を次々と切り捨てていく。切り上げる度に血がブシュウウと間欠泉のように吹き上がり、彼の白い衣と地面を赤く染めていく。

「うりゃあああああ！！！」

手にした日本刀を叫び声と共に横に薙ぎ払う。その瞬間に敵の胴が寸断され、派手に血しぶきが上がる。

数多の敵を切り捨てながら、戦場を駆け抜ける銀時と桂。

桂も銀時に負けじと敵を切り捨てては、敵の懐へと単身進んでいく。

紅く染まる瞳で敵を真っ直ぐに見据え、ただただ機械的に敵を屠っていく銀時。刀の刃が折れては、地面に転がる死体の獲物を手に取り、一匹、また一匹を切り捨てていく。

銀時から離れたところで敵を斬っていた桂は、銀時の方を振り返ると、驚きに目を見開け大声で叫ぶ。

「銀時ッ！！　避けろッ！！」

しかし、敵を斬ることに躍起になっている銀時は桂の叫びに気づかない。その間にも敵は銀時の方へと巨大で無骨な作りの大砲を向ける。

銀時が気づいたときには大砲の砲手が自身に向けられているとこ

ろであった。

「銀時、逃げるんだ。いくら貴様でもあの“ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲”には敵わんぞ！？」

桂は敵を切り捨てながら銀時の方へと向かうも、敵は銀時の方へと行かせまいと桂の前へと躍り出る。

「っ！！　クソ！！　どけ！！」

キンッ！！　ギンッ！！

交わる刃の音。四方八方から浴びせられる刃による攻撃に、流石の桂も防ぐので手一杯の様だ。

銀時は砲手が向けられているのにも関わらず、自分に襲いかかってくる敵を切りまくる。

砲手の先がピカッと光り、敵と刃を交えていた銀時と桂も砲手の方へと視線を向ける。

「銀時ぃぃぃぃぃぃ！！！」

桂は銀時の方へと渾身の叫びを投げかける。

桂の叫び声を聞いた銀時は桂の方へと視線をやり、フッと微笑を浮かべた。その瞬間、砲手から発射された光線に銀時の姿は飲み込まれ、辺りをとんでもない威力の爆風が吹き散らし、大勢の敵と共に桂も遠方に吹き飛ばされ、桂の意識も暗い暗い闇の中へと放り込まれた。

その後、攘夷戦争で『白夜叉』と呼ばれた程の伝説の侍――――坂田銀時の行方を知る者は誰もいなかった。

――――――――――多くの犠牲者を出し、長く続いた攘夷戦争も、人間の負けに終わったのであった。

【ストライクウィッチーズ】

２０世紀初頭の欧州の空に異形の飛行物体が現れ、欧州の大半を攻め落とした。

その異形の飛行物体を人々は『ネウロイ』と名付け、ネウロイに対抗するために人々が望みを託した存在――――“ウィッチ（魔女）”と呼ばれる少女たちによって編成された部隊、“ストライクウィッチーズ”（機械化航空歩兵）。

――――――彼女たちは己の身体一つで、祖国を守るため空を飛ぶ。

※今回はブリタニアに配属された５０１戦闘航空団と、異世界からやって来た白夜叉こと坂田銀時が共にネウロイと闘いながら親睦を深めていく物語である。

時は進んで、１９４３年のブリタニア上空。

その上空では“ストライカーユニット（飛行脚）”を装着した数人の少女が、突如上空に現れた飛行物体『ネウロイ』を排しようと追いかけていた。

手にはそれぞれ持ち前の銃器を手に持ち、ネウロイに散々に攻撃を仕掛けていた。

しかし、中々に手こずっているようであり、ウイッチーズたちは縦横無尽に飛び交いながらネウロイに攻撃を仕掛けるも、ネウロイは弱ることなく彼女たちに光線を発射し翻弄している。

「くっ！！　今回のネウロイは手強いな・・・・・・」

と、額に汗を浮かばせながら呟いたのは、長い黒髪をポニーテールに結い上げ、片目に眼帯をしている凛々しさ漂う美少女であり、この部隊を補佐指揮官である扶桑空軍少佐である坂本美緒であった。

「坂本さん！！　大丈夫ですか！？」

と、美緒の元へとやって来たのは、癖っけのあるサイドの髪の毛を揺らしている可愛らしい少女である宮藤芳佳軍曹であった。彼女は美緒と同じ扶桑出身で美緒に才能を見出されて、この５０１戦闘航空団に配属した新米ウィッチであるが、度々の戦闘で戦果を残している優秀なウイッチであった。

「大丈夫だ。それよりも宮藤、お前バテてはいないか？　今回のネウロイは少々骨が折れそうだ。長期戦になるやもしれん。それまでなんとか持ちこたえられるか？」

「はい！！　大丈夫です！！　私、まだまだ飛べます！！」

芳佳は手に持った九九式二号二型改１３?機関銃“Ｍ７１２シュネルフォイアー”を握りしめ、美緒の問いに力強く答える。

そんな芳佳を見た美緒は笑みを溢し、周りを飛び交う仲間に指示を出した。

「皆の者、一旦私の所に集まってくれ。作戦会議だ！！」

無線を通してみんなの声が聞こえてくる。

「「「「了解！！」」」」

その声を合図に空を飛び交っていた少女たちは、美緒と芳佳の周りへと集まってくる。

「バルクホルン！！　ハルトマン！！　どうだ、ネウロイの障壁を壊せそうか？」

美緒は傍らを飛ぶ二人の少女に声をかける。

「今回のネウロイは硬いな。中々容易には壊せないだろう」

渋り顔でそう呟いたのは、茶色のセミロングの髪をサイドにくくり分けている美少女――――ゲルトルート・バルクホルンといい、カールスラント空軍に所属する歴戦のウィッチであり、階級は美緒の一つ下である大尉である。

「え～、大丈夫だよ。トゥルーデの馬鹿力ならあんなの余裕だろ？」

と、お気楽な声音でそう呟いたのはボブカットの金髪を風に靡かせながら、ネウロイの光線をシールドを張りながら防いでる美少女――――――エーリカ・ハルトマンであった。彼女はバルクホルンと同じカールスラント空軍に所属するウィッチであり、幼い外見ながらも３００機の撃墜記録を誇るエースストライカーでもある。階級は中尉。

「馬鹿者！！　私の固有魔法を持ってしても、今回のネウロイの壁を崩すのはそう簡単では無いということだ！！」

「え～、トゥルーデの馬鹿力でも歯が立たないの～。じゃあ、やっつけようがないじゃん」

と、唇を尖らせて不平を言うエーリカであった。

「いや、何も手がないわけでもないぞ」

美緒がみんなの顔を見渡しながら静かに口を開く。

「？　それはどういう事ですか？　坂本少佐」

おずおずと手を挙げて質問したのは、灰色の髪を一本の三つ編みに結い上げている美少女――――――リネット・ビショップといい、芳佳と同時期に配属された新人で芳佳と仲がよい。ブリタニア空軍に所属するウィッチであり、階級は曹長である。

「うむ。いいか、今回のネウロイは中々に強敵だ。皆がバラバラに攻撃するでもなく、一斉に攻撃を仕掛けるんだ。勿論、コアのある部分にだ」

美緒はそこで一旦言葉を句切り、芳佳の方へと視線を向ける。

「今から作戦を言い渡す！！　バルクホルンとハルトマン、そして私がネウロイに攻撃を仕掛ける。そしてリーネは宮藤の補佐を頼む。宮藤、今回の作戦成功の要はお前だ」

「え、えぇ！！　わ、私ですか！？」

美緒の言葉に驚いて跳ね上がる芳佳。

「そうだ。お前のその膨大な魔法力が作戦成功の鍵となる。いいか、油断するなよ。気張っていけ」

「は、はい！！」

芳佳は美緒の言葉に最敬礼して応えた。

「リーネ、お前の任務は宮藤をネウロイの攻撃から守ることだ。いいな、辛いだろうけど、ここが正念場だ。頑張れよ」

「は、はい！！　分かりました！！　頑張ります」

と、芳佳と同じように最敬礼するリーネ。

それを見届けた後、美緒はバルクホルンとハルトマンを促しながら、ネウロイへと突っ込んでいった。三人が向かってくるのに気づいたのか、ネウロイも攻撃を仕掛けてくる。

それを巧みに避けながら、先に攻撃を仕掛けたのはバルクホルンであった。彼女は愛用の銃を連射しながらネウロイの装甲を壊しに

かかる。

ババババババババ！！！！！

と、弾が連射される音が空中に響き渡る。

対ネウロイ用に作られた銃による攻撃でも、全くこのネウロイには歯が立たず、バルクホルンはギリリリリと悔しそうに歯ぎしりした。

「クソッ！！　なんて硬さなんだ！！　これじゃあ、とてもコアなんて・・・・・・」

「はいはーい！！　んじゃあ次はあたしが行くよ！！」

と、エーリカがニカッと笑って、己の固有魔法である“シュトゥルム”を発動し、ネウロイに突っ込む。この技は自身の体に大気を纏い、大気を回転させながら相手に突っ込むことにより発生する衝撃波でネウロイの装甲を壊す能力である。

しかし、エーリカの固有魔法でも歯が立たず、珍しくエーリカの顔にも焦りが浮かぶ。

「えぇー！！　あたしの攻撃も効かないなんて！！　今回のネウロイマジやばいんだけど！！」

「くっ！！　まだ諦めるな！！　いいか、ウィッチーズ不可能はない！！」

と、ネウロイの光線をシールドで防ぎながら、手にした刀をネウ

ロイに向かって振り下ろす。ガキィンという硬い物同士がぶつかり合う音がして火花が迸る。

「チッ！！　これでも駄目か？　一体どうすれば・・・・・・？」

「坂本さん、バルクホルンさん、ハルトマンさん！！」

芳佳が離れた場所でネウロイと交戦する三人を見て、悲痛な叫び声を漏らす。

どう見ても苦戦中だ。あの歴戦のウィッチである三人でさえ歯が立たないネウロイに、自分なんかが敵うはず無い。

「・・・・・・どうしよう、リーネちゃん。あのままじゃ坂本さんたちが！！」

「うん、でも・・・・・・。私たちじゃどうしようも出来ない。基地にいるみんなに応援を頼んだ方が・・・・・・」

「そうだけど、無線は坂本さんが持ってるし。あの様子じゃ無線をかける暇はないと思う」

「そうだよね・・・・・・」

と、芳佳とリーネが互いに顔を見合わせながらそう呟く。

このままじゃ命令違反だが、だけどあの三人を見殺しにするわけにはいかない。

芳佳とリーネは再度顔を見合わせた後、何やら決心した面持ちを浮かべる。それからストライカーユニットに魔力を注ぎ込み。猛スピードで美緒たちの元へと駆けつける。

自分たちに近づいてくる芳佳たちに気づいた美緒は声を荒げる。

「こら！！　宮藤にリーネ！！　命令違反だぞ、持ち場に戻れ！！」

「イヤです！！　私も坂本さんたちと一緒に戦います！！」

「私も、私もです！！　戦わせてください！！」

美緒の言葉に声を揃えて反論する芳佳とリーネ。二人の言葉を聞いて、美緒は面食らった表情を浮かべたが、いつものように豪快に笑い始めた。

「アッハハハハハハ！！　そうかそうか。やはりお前たちはお前たちだな！！　よし、お前たちも戦え。責任は私が取る！！」

「「はい！！　有り難うございます！！」」

芳佳とリーネは仲良く唱和した後、ネウロイに向かって一直線に向かっていった。

しかし、その後ろ姿を見つめながら、美緒は苦々しい表情を浮かべ空を仰いだ。

（・・・・・・ああは言ったが、そう長くは持たないな。ここはやはり応援を頼んだ方が・・・・・・）

美緒は無線機をギュッときつく握りしめ、基地に待機する仲間の顔を思い浮かべる。応援を頼みたいが、最近はネウロイの出現も多発しており、大切な戦力を無駄に消費したくはない。

やはりここは自分たちで乗り切るしか・・・・・・。

でも、このままいけば全滅という恐れがある。

仲間の命と任務、どちらを取るか天秤に掛けていると・・・・・・。

不意に空が暗くなり、雲行きが怪しくなり始めた。所々、落雷が海面に落ち細波を立て、雷音が辺りに轟く。

「チッ、天候も悪くなり始めたか・・・・・・。ここは一旦撤退したほうが・・・・・・」

と、美緒が呟いたその時。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！　落ちてる！？　ねぇ、これ落ちてるよね！？」

男の声がはるか上空から響いてきて、それがだんだんこちらへと近づいてきていた。戦っていたバルクホルンたちも、はたまたネウロイでさえも攻撃の手を止め、声のする方へと視線を向ける。

すると、雲の裂け目から銀髪の男が、もの凄いスピードで海面へと落花してくるのが見え、ウィッチーズたちは驚きに目を見開けた。

「えっ！？　えっ！？　なんか、雲の裂け目から男が落ちてきてるんだけど！？」

ハルトマンが目をまん丸く見開いて叫ぶ。

最早ネウロイの存在すら頭の片隅に吹き飛ばしたようであった。

他の面々はあまりの出来事に言葉にならないようで、あんぐりと口を開けた実に間抜けな表情で、男が海面に落ちてくる様をジッと眺めていた。

すると、海面に落ちていた男は運悪くネウロイの真上に落ちてしまい、ブベッという呻き声と共に男は無様にネウロイの上に俯せに倒れる。

男の呻き声を聞いて我に返ったウィッチーズの面々は、慌てて男の救出に向かうも、ネウロイの攻撃が激しすぎて迂闊に近寄れなかった。

自分たちの無力さに歯がみする美緒たちであったが、しばらくして目の前で起きた光景に再び目を大きく見開けたのであった。

あれ？　これ？　落ちてるよね？　なんで俺海に向かって真っ逆さまに落ちてんの？

確か、俺戦場にいたよね？　それで敵の大砲をもろに食らって、あぁ、俺死んだなと思ったら。

何で、海に向かって落ちてんの？　あ、これ大事なことだから二回言うけど。

ともかく俺は死んでないみたいだな。あぁ、よかった。昨日坂本に借りたジャ○プ３月号まだ読んでなかったからちょうどいいや。ベジー○と孫○空のバトルが気になってしょうがなかったからな。

と、実にどうでも良いことを考えながらどんどん海に向かって落ちている銀時。

やっぱりよそ事をしながら違うこと考えていたらろくな目に遭わない、ということを銀時はこのあと身に染みて理解した。

次の瞬間、水の感触ではなく硬い鉄のような感触が全身に走った。

「ブベッ！」という情けない呻き声つきで。

どうやら自分は海面ではなく、何か硬い物の上に落ちてしまったようだ。

あぁ、全身が激しくいてぇー。

痛む身体に鞭打ちながら銀時は身を起こすと、驚きの光景が眼前に広がっていた。

なんと、ヘンな機械を足に装着し、細い身体に似合わない無骨な作りの銃器を持った少女が宙に浮きながら、こちらに向かって何事か叫んでいる。

残念ながら辺りが五月蠅すぎて、何を言っているが全然分からなかったが。

「・・・・・・なんだアレ。タケコ〇ターの新型版か？　まぁ、プロペラ付いてるし、あながち間違ってはいないだろう。つか、俺もしかして浮いてる？　もしや、これは幻の空飛ぶ雲“ＫＩＮＮＴＯＵＮＮ”か？　あれ？すごくねぇ？　俺ってば次はドラゴン〇ールの主役の座が回ってくるんじゃねぇ？」

と、したり顔で呟いていると、急に真っ赤な光線が銀時を襲う。

「うぉう！！　なんだいきなり！？　まさか、このＫＩＮＮＴＯＵＮＮが！？　くそっ、やっぱり孫〇空じゃないとイヤってか！！　銀髪天パーな主人公はイヤってか！？　どいつもこいつも馬鹿にしやがって！！　俺だってな、サッラサラヘアーが良かったんだよ！！」

と、憎々しげに舌打ちすると、鞘にしまっていた刀を抜刀し、ビーム？　を放ってきたＫＩＮＮＴＯＵＮＮもどきに斬りかかる。

すると、あれほど硬かったネウロイの装甲が嘘のように壊れ始め、キラキラとした粒子を辺りに撒き散らす。

「うおりゃあああああ！！　三次元舐めんなよ、カメカメ〇ーッ！！！！」

と、相変わらずのデタラメな発言を叫びながら、ＫＩＮＮＴＯＵＮＮもどきを切りつけていく。

すると、真っ赤な球状の物体が銀時の前に姿を現した。しかし、

怒りに我を忘れた銀時はその真っ赤な球体に気づくことなく、その上に刃先を叩きつけるように振り下ろす。

パッキィィィン！！！

と、硬い物質が割れる音と共に、今まで足場にしていた物体が粉々に崩れ落ち、銀時の身体は再び宙に投げ出されるのであった。

「うぉぉぉぉぉぉ！！　悪かった！！　俺が悪かった！！　あぁ！！　気持ち悪い感触！！　あのジェットコースターに乗っているときの感触ぅ！！」

と、喚きながら海面へと落花し始める銀時。

そんな銀時の身体を支えたのは、数人の美少女たちであった。

第1章　あまり大人を舐めるなよ、このヤロー！！

「・・・・・・あれ？　俺まだ生きてる？　つか、まだ宙に浮いてるんだけど！！」

銀時がうっすらと瞼を開け、未だに自分が宙に浮いている原因を探ってみると、すぐに解明できた。
なんと遠目で見たあの少女たちが銀時の身体を支えているのだ。

「・・・・・・あー、俺まだ夢を見てんのか？　ハハハ、そうだよな。女がタケコ〇ターの新型みたのなのを装備して空に浮かんで、しかも俺の手を掴んでるなんて、そんなのありえなーい。ありえないったらありえなーい」

「何をブツブツ呟いているんだ？」

と、眼帯をした凛々しさ漂う美少女が怪訝そうに口を開いた。

「うえッ！？　え、いや、あの！！　その俺は決して怪しい者ではなく！！　そう、ただの空から落ちた侍さ！！」

しどろもどろに答える銀時。

どこをどう見ても怪しさ爆発であった。

そんな不穏な空気が漂う中、唯一空気が読めない少女エーリカが、キラキラとした瞳で銀時に話しかけてきた。

「ねぇねぇ！！　キミ凄いね！！　ネウロイをあんなすぐにやっつ

けちゃうなんて！！」

「こ、コラ！！　ハルトマン！！」

「はぁ？　ネウロイ？　なんだそりゃ？　あれはＫＩＮＮＴＯＵＮＮじゃないのか？」

と、エーリカの口から出た聞き慣れない単語に、銀時ははてな？と首を傾げる。

「えっ？　キントウン？　何それ？」

と、銀時の口から出た単語に、今度はストライクウィッチーズの面々が固まる番であった。

どうにも話がかみ合わない。

不審に思った美緒であったが、曲がりなりにもネウロイを一人で仕留めた男である。ここはひとまず基地に連れ帰って仲間の意見も聞くべきであろう、と冷静に判断した。

事の状況があまり飲み込めていない芳佳たちにこの男を基地に連れて帰る旨を説明し、どうにかこうにか基地へと戻る帰途につけた一同であった。

力持ちであるバルクホルンとエーリカに腕を取られながら、銀時は彼女たちと何やら口論していたのであった。

「お前ら、キントウンもしらねぇのか？　ほら、あれだよ。あの有名な孫〇空が乗ってんだろ。あの黄色い雲のやつ」

「いや、知らないけど。ねぇ、トゥルーデは？」

「わたしが知ってるわけないだろ！？」

・・・・・・何を話してるんだか。

一方、ブリタニアに基地を構える第５０１戦闘航空団の残りのメンバーは、出撃したメンバーの帰還が遅いので、基地の玄関先で首を長くして今か今かと待っていた。

「・・・・・・遅いわね、何かあったのかしら？」

と、端正な顔を曇らせて呟く美女の名はミーナ・デュートリンデ・ヴィルケといい、彼女もまたバルクホルンたちと同じカールスラント空軍所属のウィッチであり、階級は中佐。

この５０１戦闘航空団の司令官も務めている。

「あぁ～、少佐。大丈夫なんでしょーか・・・・・・」

頬に手を当ててそう呟くのは、金髪碧眼の美少女であるペリーヌ・クロステルマンである。ガリア空軍所属で、坂本美緒少佐を心酔している。いつもは生意気そうに光らせている眼鏡も心なしか曇りがちであった。

「だーいじょうぶだよ～。そんなに心配しなくても～」

「そうだぞ～、ツンツン眼鏡。何せあのバルクホルンとハルトマンが一緒に行ってるんだぜ？　もうすぐ帰ってくるさ」

と、あまり気にしてない風な口調で答えのは、黒髪をツインテールにしている褐色美少女であるフランチェスカ・ルッキーニ少尉とオレンジの髪を無造作に伸ばし、額にゴーグルを当てているグラマラスな美女であるシャーロット・E・イェーガー大尉である。

彼女たちは国籍は違えども、まるで親子のように仲が良いことで有名であった。

「ちょっと！！　お二方！！　心配じゃありませんの！？　出撃してからもうかれこれ四時間は経ってるというのに！！」

と、あまりにもお気楽すぎる言葉に、ペリーヌが毛を逆立たせて怒鳴りつける。

「う～ん。まぁ、確かにちょっと遅いか？　なぁ、ルッキーニ」

「うん、そうだね～。あの坂本少佐にエーリカたち二人がついて行って遅いのは変だよね？　芳佳だけならまだ分かるけど～」

ペリーヌの言葉を聞いてルッキーニたちも首を捻った。

「・・・・・・美緒」

ミーナが無線機を握りしめたその時、聞き慣れた音が上空が聞こえてきたので、一同は慌てて音のする方へと視線を向ける。

すると、そこには無傷の美緒たちがこちらに向かって手を振って

いた。

「あぁ！！　少佐！！　無事だったんですね！！」

と、ペリーヌは感激のあまり、普段は出さないような大声を上げる。

しかし、その上機嫌もある人物を見て唐突に終わりを迎えることになる。

その人物とは勿論、バルクホルンとエーリカに抱えられて運ばれてくる銀髪の男――――――坂田銀時であった。

何も怪訝に思ったのはペリーヌだけではない。ミーナも勿論シャーリーもそうであった。

唯一、年齢が低いルッキーニだけが何の違和感なく、突如現れた銀時にも好意的な視線を送る。

地面に降り立った面々を見て、双方の間には微妙な沈黙が漂う。

その沈黙を破ったのは、他でもない銀時であった。

「あ～、わりぃんだけど・・・・・・、傷薬あるか？」

〈食堂〉

今まで部屋で寝ていた夜間哨戒班であるエイラ・イルマタル・ユーティライネンとサーニャ・V・リトヴャクを加え、食堂の椅子に

座り傷の手当てをする銀時を遠目に見つめていた。

（おい！！　何なんダ！！　あの男は！！）

（さぁ・・・・・・、美緒が言うには突然空から降ってきて、刀一本でネウロイを退治したとか・・・・・・）

（えぇ！！　それが本当ならすごいことだぜ！？）

コソコソコソ。ゴニョゴニョ。

肩を寄せ合って内緒話を展開するウィッチたち。

まぁ、それもそのはずだろう。

突如空から落ちてきて、自分たちでも歯が立たなかったネウロイをいとも簡単に倒してしまうなんて。誰が信じようか。

しかも、彼は男性である。男ではウィッチにはなれない。その彼が己の持つ刀一本でネウロイの硬い装甲を破壊し、コアを的確に木っ端微塵に壊したとは・・・・・・。

う～ん、やはり信じられない。

そう思う原因は銀時の恰好にもあった。

血まみれの白い衣に、一昔前の甲冑を身につける様は、伝記物に出てくる武士のようである。それに机の角に立てかけている日本刀も、かなり年期のいった代物であることは容易に窺えた。

ボサボサの銀髪に、覇気のない死んだ魚のような瞳。でも、それさえ除けば端正な顔つきをしている。

「あ～、そんなマジマジ見られると気まずいだけどよぉ。普通にしてもらえるとありがたいな」

と、無遠慮に浴びせられる視線に耐えきれなくなった銀時が呟くと、ウィッチたちはハッとした顔つきになり恥ずかしそうに顔を見合わせた。

それもそうだ。あんな見せ物のように見られては落ち着けないだろう。

「あの、そのすみません。・・・・・私はこの第５０１戦闘航空団の司令官を務めさせてもらっているミーナと申します。話を聞いたところによると、私の部下を助けていただいたようで、本当にありがとうございます」

と、畏まってお礼の言葉を口にするミーナに、銀時は困惑の表情を浮かべる。

「別にいいって。あのキントウンが俺に攻撃を加えてきたからやっつけただけだ。だから、礼を言われるほどのことじゃねーよ」

「それでも助けていただいたことには変わりませんわ。本当にありがとうございます」

と、何度も頭を下げるミーナ。その後ろでは同じように数人の少女が頭を下げる。

「あー、まぁ、そんなに気にすんなって。俺も海に落ちそうになったのを助けってもらったし。お相子って事でいいだろ。この話はもう終わりにしよーや」

ミーナは彼の人徳の高さに感動した。普通ならばここでもっと要求などをしてくるものだが、彼はそんなのを気にするなと言ってくれる。

「ところで、あー、ミーナっつったか？」

「えぇ」

「ここは一体どこなんだ？」

「・・・・・・はぁ？」

と、耳を穿りながら答えた銀時。その言葉を聞いてミーナは勿論、その他の少女たちも一様に目を丸くしたのであった。

「ふ～ん。ネウロイねぇ・・・・・・。あのキントウンみたいなのが。へぇー、ほぉー。見かけによらないものだな」

と、ミーナたちから説明を聞いた銀時は、意外そうな表情で相づちを打ちながら頻りに頷いていた。

「さっき倒したのがネウロイって言うのか？」

「うん、そうだよ。あれがネウロイ。あれが世界中にウジャウジャいるんだよ」

と、エーリカが銀時の問いに答える。

「そうか。それでお前たちはそのネウロイを倒す？　仕事をしているのか？」

「う～ん、まぁ当たらずとも遠からずだな。私たちはウィッチって言って、あのネウロイを倒すために編成された特別部隊なのだ」

と、腕を組んで答えたのはバルクホルン。

「はぁ？　ウォッチ？　お前ら一体何を見るんだ？」

「ウォッチではない！！　ウィッチだ！！　まぁ、分かりやすく言えば魔女だ！！」

バルクホルンが自信満々に答えた瞬間、銀時の姿は影も形もなかった。それと同時に部屋の隅に置いていた壺に銀時が上半身を突っ込んでいた。

ガタタタタタタ！！！！　激しく音を立てながら何とか中に入り込もうと藻掻く。

「「「「「「「「・・・・・・・・ぇぇぇぇぇぇぇぇ！？！？！？」」」」」」」」

と、銀時の突然の行動に声を張り上げる少女たち。

「お、おぃ。どうしたんダヨ、あいつ。頭可笑しくなったたんじゃねーノカ？」

「・・・・・・エイラ、そんなことを言っては駄目よ」

と、失言を吐くエイラとそれを咎めるサーニャ。初対面の人にも言われるほど、彼の行動は変わっていた。

「あ、あの一体どうしたんですか？」

と、芳佳が銀時に近づき、心配そうに声を掛けると、

「こ、これはあれだよ。た、た、タイムマシンの入り口なんだよ。無限の彼方への入り口なんだよ！！」

震える声で答える銀時に、皆はなるほどと何やら得心したように微笑む。

「・・・・・・もしかて怖い話が苦手なんだろ？」

「んな！？　そんなわけないだろ！！　は、はーん。そんなもんこの俺が怖がるわけないだろーが！！」

と、シャーリーのからかい言葉にも、ムキになって言い返す銀時であった。

どこからどう見ても怖がっているだろ、これは・・・・・・。

「へ～、いい大人なのに怖い話が苦手なんだ～」

と、どこまでも無邪気なルッキーニがニシシシ、と笑いながら銀時をからかう。

それを合図にその場にいた全員が笑いながら、銀時のことを散々にからかい始める。

「アハハハハハ！！　ま、まさか、ネウロイをいとも簡単に倒した男がなぁ！！」

「ぷっ、ぷぷぷぷ！！」

「アハ、アハハハ！！」

と、彼女たちは盛大に笑い声を上げて、壺に頭を突っ込んでいる銀時を指さす。

だが、ここまで彼女たちが笑い声を上げているのは、今までにないことである。特に初対面の人間に対しては。あの人一倍人見知りが激しいサーニャも笑っているのだから、これは凄いことである。

つまり、彼は彼女たちに受けいられたのだ。

まぁ、確かに・・・・・・。彼のような人物は中々いないだろーけど。

すると、壺に顔を突っ込んでいた銀時はプルプルと小刻みに震えだし、やがてゆっくりと顔を上げた。

それからユラァリと笑い転げる少女たちに振り向き、キッと顔を上に上げた。

その銀時の顔を見て、笑い転げていた少女たちはヒッと息を呑んで笑うのを止める。

「・・・・・・テメェらぁ！！　大人をからかうのもいい加減にしやがれぇ！！！」

ドッカァァァァン！！！

と、瞳を紅く煌めかせ、銀時は自分をからかっていた少女たちに向かって突進していった。

「うわぁー！！　怒ったぞー！！　逃げろ～！！」

「逃げろ逃げろ～♪」

と、シャーリーとルッキニーを筆頭に、少女たちはキャーキャーと笑いながら蜘蛛の子を散らすように逃げ回った。

そんな一同を見て、ミーナと美緒は互いに顔を見合わせながら微笑んだのであった。

第1章　あまり大人を舐めるなよ、このヤロー！！（後書き）

今日はここまでです。ちなみに私はエイラとエーリカ推しです。
いや、みんな好きですけどね。

第2章　どこの世界でも自己紹介は大事！！

――――――騒動があってから数時間後。

すっかり騒動が沈静化した基地内では、ある事が始まろうとしていた。

その一部始終はこうである・・・・・・。

「と、いうわけで、第3回チキチキ自己紹介タイムを開催したいと思いまーす」

リビング兼作戦会議室の一室に銀時を筆頭に、美少女揃いのストライクウィッチーズの面々がソファーなどに腰掛け、突然の銀時の提案を聞いて怪訝そうに眉を顰めた。

「・・・・・・いきなり何なんだ？」

と、思いっきり眉を顰めた美緒が部屋の中央に仁王立ちする銀時に尋ねた。ぶち切れた彼に半ば強制的にここに連れてこられ、内心ビクビクと怯えていた面々であったが、彼はすぐにいつもの覇気のない表情に戻り、先程の発言を口にしたのだが・・・・・・。

全く、彼のすることはてんで理解できない・・・・・・。

「というか、何でいきなり自己紹介などする必要があるんですの？読者さんは私たちの名前など知っているのに。それに何で第3回なのかも理解できませんわ」

ペリーヌも美緒の意見に同意的なようだ。

そんな否定的な言葉を聞いて、銀時はクワッと眼を見開いて美緒たちを睨み付ける。

銀時の凄まじい眼力にウィッチーズの面々は口を閉ざして押し黙る。

それから銀時はすぅーと大きく息を吸って、それを吐き出すかのように咆吼した。

「ばっかヤロー！！！！！　テメェらそれでも金〇ついてんのかッ！！　いいか！？　今の世の中自己紹介もろくに出来ない奴がまともな企業につけると思うなよ！！　って、どこかのえらい社長が言ってました！！
あれ！？　最後の作文！？」

ズコォォォォォォォ！！！！！！

と、銀時の口から発せられた台詞にみんな一斉に椅子から転げ落ちた。

なんというか・・・・・・、そう拍子抜けしたのだ。

だって、あんな真面目な表情で、こんな巫山戯た言葉が出ると予測できただろうか？

「って！！　企業って何！？」

「そ、それにき、きききき・・・・・・・」

「金〇？」

「こらっ！！　ルッキーニ少尉！！　そんなのを口に出していうものじゃない！！」

「つか、自己紹介の件と何の関係もないじゃん！！」

と、ギャーギャーと発情した猿のように騒ぎ立てるウィッチたち。

全く女って生き物は騒がしい。

あー、だから姦しいって女部で出来てんだな・・・・・・。

あー、納得納得。

銀時は鼻をほじりながら彼女たちが騒ぐ様を見つめ、淡々とした表情で一人納得する。

つか、騒ぎの原因はお前の一言だろーに。

「さぁ、みなさん。そろそろ騒ぐのはお開きにしましょう」

パンパンと手を叩き、収拾の付かなくなったこの騒ぎを静めたのは、他でもないこの部隊のまとめ役であるミーナ中佐であった。知的さ漂う美人なミーナの一声で、激しく騒いでいた少女たちは我に返り静まりかえる。

その見事な手腕に流石の銀時も惚れ惚れしたほどだ。

みんなが落ち着きを取り戻したのを見計らって、ミーナは銀時に振り向いた。

「あなたのその提案はすばらしいと思いますが、みなを煽るような不本意な発言はなるべく控えてくださいね。みなさんお年頃の娘ですので」

「あー、わーったよ。これからはなるべく善処するわ。んじゃま、気を取り直して・・・・・・。誰から行く？」

ミーナの忠告を軽く受け流しながら、さっきの続きを口にする銀時を見て、ミーナは額に手の平を当てハァ～と溜息を吐きながら首を振った。

そんなミーナを同僚のバルクホルンと美緒が慰めていた。

そんなミーナたちを余所に話はドンドン進んでいき、

「はーいはいはーい！！　まずあたしからする～！！」

と、銀時の言葉に満面の笑顔で挙手しながら答えたのは、最年少ウィッチであるルッキーニであった。銀時はルッキーニの潔さに感服し、彼女に勢いよく指を突きつけた。

「よーし！！　チビ助！！　テメェから行け！！　チビ助から順に言っていくよーに！！」

それと同時にえ～！！　とウィッチたちから不満の声が上がる。

まぁ、叫びたく理由も分からないでもない。

誰だって自己紹介はいやなものだ。極力したくはない。

ただ一人幼稚なルッキーニはやる気満々である。

ニコニコと笑いながら、

「んとねー、あたしの名前はフランチェスカ・ルッキーニ。ロマーニャ空軍に所属しているんだけど、今はこのストライクウィッチーズに配属されているんだー。歳は一番若いんだよー。階級は少尉なんだ～。えへへ～、凄いでしょ～」

「あー、すごいすごい（棒読み）」

と、銀時は自分でフッといて何だが、ルッキーニのテンションに付いていけない気味であった。

つーか、地名言われても良く分かんなかった。

「あ～、言ってくれて何だけどよ。俺、地名とかよくわかんねぇから名前とか、好きなもの位にしてくれないか？」

との銀時の要望も踏まえて自己紹介は再開された。

「じゃあ、次はあたしだな。あたしはシャーロット・E・イェーガー。階級は大尉だ。好きなものはバイクと機械いじり。あと、ルッキーニのお守りかな？　愛称はシャーリーだ。好きに呼んでくれ」

「私はペリーヌ・クロステルマンですわ。階級は中尉です。好きな

ことは特にないですわ」

「私はゲルトルート・バルクホルンだ。階級は大尉。好きなことは、まぁー特にはないが、料理はわりと得意だ」

「わ、わたしは宮藤芳佳です！！　階級は軍曹です。趣味はお料理かな？」

「わ、私はリネット・ビショップです。階級は軍曹です。みんなからはリーネと呼ばれています」

「はーい、あたしはエーリカ・ハルトマンでーす。そこのお堅いトゥルーデと同じ国の出身でーす。階級は中尉。趣味はー、そうだな、寝ることと巨乳を揉みしだくことかな？」「こらッ！？　ハルトマン！！」と、バルクホルンの怒鳴り声が聞こえたが今はスルーしておこう。

「ゴホン！　私は坂本美緒だ。階級は少佐。趣味は、そうだな・・・・・・。訓練だな！！」

「・・・・・・あ、あの私はサーニャ・V・リトヴァクです。階級は中尉です。趣味とは言えないけれど、歌とか歌うのが好きです」

「わ、わたしはエイラ・イルマタル・ユーティライネンだ！！　階級は少佐。タロット占いが得意ダゾ。
い、いいか！！　サーニャには指一本触れるんじゃないゾ！！」

「そして最後に、私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケといいます。階級は中佐。趣味はそうね。歌を歌うのが好きだわ」

と、一通り自己紹介が済んだところで、皆の視線は部屋の中央に立つ銀時に移った。

そう残すところは彼だけだ。

銀時はみんなの視線を一心に受けながら、自信満々に口を開いた。

「・・・・・・俺の名前は坂田銀時。侍だ！！」

ド、ドドォ～～～～～～～～～ン！！！！

と、派手な効果音つきで物々しく言い放った銀時。

あまりの簡潔な自己紹介に、ミーナたちは呆然とした表情を浮かべた。

「あ、あの～、短すぎじゃない？　あれだけあたしたちに要求しておいてさ」

と、エーリカが尋ねると、銀時は不敵に笑い、

「フッ、男は多くは語らねぇ！！　何事も簡潔だ！！　あっ、一つ付け足すが俺は一日一回は糖分を摂取しないと死んでしまう謎の奇病にかかっているんだ！！」

「「「「「「そんな病気ねぇよ！！！！！！」」」」」」

と、銀時のメチャクチャな発言に皆が突っ込む。

「うぇ！？　のっけから全否定！？　まぁ、嘘なんだけどね！」
と、銀時は突っ込みなど物ともせずに笑いながら突っ込み返す。
ミーナたちは銀時のマイペースに振り回されクタクタであった。
かつてこれほど疲れたことはあっただろうか？
いや、ネウロイと戦った後でもこれほどの疲労感は感じたことはない。
なんて言うか、体力的ではなく精神的なものなのだろう。
しかし、皆が疲弊している中、ただ一人だけそう。
坂本美緒だけが鋭い目つきで銀時を見つめていた。
彼女だけは銀時の本当の姿を見抜いていた。
彼のあの巫山戯た態度は演技であると、彼の本質は自分と同じ歴戦の戦士であると。
美緒は銀時の方へと歩み寄り、彼に愛用の刀を突きつけた。
「？　何だ、いきなり？」
「坂田銀時。貴様に決闘を申し込む！！」
一瞬の間の後、室内は驚愕を含んだ叫び声に満たされた。

「・・・・・・マジで？」

ただ一人銀時だけは淡々と美緒のことを見下ろしながら、ポツリと一言だけ呟いたのであった。

第2章　どこの世界でも自己紹介は大事！！（後書き）

今日はここまでです。次は美緒と模擬試合です。ここで銀時の強さが明るみに出ます。まぁ、それでも半分の実力も出さないでしょーが。

第3章　決闘と新キャラ登場！？　って、ドラ〇ンボールのパクリじゃね？

「――――――はぁ？　決闘？　って、誰と誰がするんだよ？」

銀時は美緒の目を真っ直ぐに見つめながら口を開く。美緒はというと銀時に扶桑刀を突きつけたポーズのまま微動だにせず、同じように銀時の死んだ魚のような瞳を真っ直ぐに見つめながら口を開く。

「勿論、私と貴様がだ。意味がよく理解できないのならもう一度だけ言うぞ。・・・・・・坂田銀時、貴様に決闘を申し込む。勿論、その刀と私の持っているこの扶桑刀でな！！　貴様も武士ならその言葉の意味が分かるであろう？」

「み、美緒！！」

ミーナが美緒の発言に慌てて口を挟むも、当の美緒は聞く耳を持たない。

銀時は美緒の身体から発せられる微かな殺気を感じ取り、フッと微笑をこぼすと机の角に立てかけてあった日本刀を手に取り、それを腰布に挿す。

「あー、いいぜ。決闘だろーが、なんでも受けてやる。それでお前が満足するんならな」

「・・・・・・お前ならきっとそう言うと思った」

と、銀時と美緒は互いに顔を見合わすと笑みを交わした。その笑みはやけに晴れ晴れとしていた。

恐らく似たもの同士のオーラを感じ取ったのだろう。現に美緒はウィッチというより、武士といった方がしっくりくる。

肩を並べて部屋を出て行った二人を見て、残ったウィッチーズの面々は顔を見合わせ、二人の後を追いかけていった。

みなが出て行った部屋の中ではミーナがハァと思い溜息を吐いて首を振り、そんなミーナをバルクホルンが慰めるように肩を軽く叩いたのであった。

場所は変わって、いつも美緒と芳佳が走っているグラウンドへとやって来た。

銀時と美緒はグラウンドの真ん中に対峙し、それを少し離れた場所を見学するウィッチーズたち。

美緒は鞘から刀を抜いて、ごくごく基本的な構えを取る。胸の前に刀を持つ、例えるならそう、剣道の際に取る構えのようなものだ。

銀時も昔、ある人物から刀の使い方を教わる際に教わった、剣術の際のごくごく基本の型であった。

だが、銀時は基本の型などを覚えるのがめんどくさくて、ほとんど自己流の構えを編み出してしまい、それからはずっとその構えである。

「・・・・・・随分と綺麗な構えじゃねぇーか。どこかの道場に通っていたのか？」

「あぁ、幼少の頃から近所の道場に通っていた。その頃の癖が今になっても抜けきっていない。そういうお前はどうなのだ？　坂田」

「んー？　あぁ、俺はそうだな。道場には行ったことはねぇが・・・・・・。コレの使い方はある人から教えてもらったぜ」

と、腰布に挿した刀の柄を軽く握りながら、どこか懐かしむような口調で語る銀時。

美緒はその銀時の表情に、何か自分と通ずるものを感じたが、すぐに己の感情を律した。

今は決闘だ。敵に情けは無用だ。

ギュッと柄を握る手に力がこもる。

まだか。

あいつは何故抜刀しないんだ？

糸を張り詰めたような緊張感が辺りを包み込み、美緒はゴクリと生唾を飲んだ。

何せ、ネウロイを魔力も通っていない刀一本で倒してしまったほどの腕前を持つ男だ。いくら決闘といっても本気でいかなければ・・・・・、自分はやられてしまう。

それは何としても避けたかった。自分を慕う後輩たちの前で、そんな失態は侵したくない・・・・・・。

「・・・・・・まぁ、そんなに気張るな。これは決闘であって殺し合いじゃない。おっ、そうだ・・・・・・。折角の決闘なんだ。どうせならかけないか？」

「かける？　一体何をだ？」

美緒は銀時の提案に眉を顰める。

全く、この男は決闘を何だと思っているんだ。遊技ではないのだぞ？

「そうだな・・・・・・。テメェが勝ったら俺はここを去る。それで俺が勝ったら・・・・・・、ここに住み込みで働かせてもらうってのはどうだ？」

「んな！？」

と、美緒は銀時の提案に驚きの声を上げた。勿論、端から見学していたミーナたちも驚きの声を上げる。

「えぇ！！　なにそれ！？　そんなかけにも何にもなってないじゃん！！　って、銀時の分が悪すぎるよ！！」

「それに素性が分からない男をこの基地においとくなんてありえねーダロ！！」

「そうですわ！！」

と、散々に騒ぎ立てる。

「私も・・・・・・、その提案はちょっと承諾しかねます」と、ミーナも顔を渋らせる。

しかし、目を瞑ってしばらく黙考していた美緒は、

「・・・・・・よし。その条件飲もうではないか！！」

何と銀時の出したかけを賛成したのである。

これには流石のウイッチたちも驚きであった。

まさか、あの坂本美緒少佐が・・・・・・。

「み、美緒！！　それ本気なの！？」

「あぁ、本気だ。何、私が勝てばいいことだ。それに、私が負けてもいいことではないか。この男はウィッチを撃破する力を持っているのだぞ。別に置いておいても問題はあるまい」

ミーナは彼女の発言に声を荒げるも、美緒の真剣な表情を見てこれ以上反対するのを止めた。

「・・・・・・分かったわ。あなたがそこまで言うのなら、私は何も言わないわ。美緒、頑張ってね」

「・・・・・・あぁ。ありがとう」

美緒はミーナの本意を悟り、言葉静かに礼を述べた。

「――――さぁ、待たせたな。坂田銀時、いざ尋常に勝負」

美緒は柄を握る手に再び力を込め、より一層鋭さを増した瞳で銀時の姿を見据える。彼は美緒の視線を受けてなお気の抜けた表情を浮かべていた。

というか、今この瞬間にも彼は腰に下げた刀を抜刀する気配はない。

「・・・・・・抜かないのか？」

美緒は淡々と銀時に尋ねると、銀時はニヤリと意地悪笑みを浮かべた。

「さぁな。それはテメェの腕次第って事だ。なぁ、坂本さんよ？」

と、あからさまな挑発の言葉に、短気な美緒はすぐ乗ってしまい、構えた刀の刀身を銀時の方に傾けながら猛スピードで駆け出した。

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

その速度を生かしたまま、美緒は刀を握った手を上に振り上げ、仁王立ちして立ちつくしている銀時に向かって振り下ろすが、

バシィィィィ！！！！

「んなッ！？」

なんと、渾身の力を込めて振り下ろした刀身を、この銀髪天パー

男――――――坂田銀時は頭の上にかざした両手で挟み込んで止めたのだ。

「フッ、これが秘技“真剣白羽取り”」

銀時が素手で真剣を止めるのを見たウィッチーズから歓声が上がる。

「おー！！　すごい！！　あれがシラハドリかー！！　本当に素手で受け止めてるー」

「うわぁ～、すごっぉーい！！！」

と、ルッキーニとエーリカが目を輝かせながら声を揃えて叫ぶ。

他のみんなも感嘆の声を漏らしていた。

あの坂本少尉の真剣を素手で止めるなんて！？

改めて銀時の凄さを垣間見て、ネウロイを倒したという話に信憑性が出て来た。

「くっ、ぐぐぐぐ・・・・・・！！」

美緒は柄を握る手に力を込めるが、一向に動く気配がない。まるで万力で挟まれたかのようだ。

「どうした？　これで終わりか？」

「ぐっ！！　そんなわけないだろう！？　貴様こそ早く刀を抜いたらどうだ！！」

銀時のからかいの声に美緒は顔を真っ赤に染めて叫んだ。

しかし、銀時は美緒の言葉を軽く無視して、美緒の刀身を挟んだ手を前方に押し出す。すると、その反動で身体を前のめりに押し出していた美緒はバランスを崩してしまい、よろよろと蹌踉けてしまう。

銀時はその隙を見逃さず、音も立てないほどの素早さで美緒の懐に入り込み、鞘に入ったままの刀を目にもとまらぬ速さで抜き放ち、その勢いのまま美緒の腹へと打ち込む。

まぁ、俗に言う鞘うちだ。

「ぐ、あっ・・・・・・・」

美緒はカハッと短く息を吐き、ガクゥと力なく膝を突いた。そして手にした扶桑刀を地面に落とす。
脱力した美緒の身体を銀時は片手で支える。

静寂の後・・・・・・、グラウンドを盛大な歓声が包み込んだ。

ペリーヌとミーナは気絶した美緒を看病し、エーリカたちは銀時の周りに集まり、彼の強さを称えていた。

そのグラウンドから離れた場所に立つ整備室から、一人の少年？

がその様子をこっそりと見つめ、楽しそうに微笑んだ。

「ふふふ、面白そうな奴だな・・・・・・」

謳うように呟いた後、少年は煙に消えるように姿を消したのであった。

第3章　決闘と新キャラ登場！？　って、ドラ〇ンボールのパクリじゃね？（後

今日はここまでです。なんかあっさりですね。すみません・・・・・・。次は銀時の歓迎会と新キャラと顔合わせです。

新キャラ設定

シャルル・イヴァン（１２）

エイラと同じスオムス出身の天才整備兵。最年少整備兵長に任命されるほどの腕前を持つ。

深く帽子を被り、作業用ゴーグルを首にかけている。普段は滅多に人前に出ないが、グラウンドで美緒を打ち負かした銀時を見て、シンパシーを感じたのか銀時と話すようになる。

少年かと思いきや、実は女の子であり、自身もまた魔法力があり、ウィッチになれる素質はあるのだが、本人はウィッチになる気はない。

ネウロイを倒すときは己が開発した飛行機で銀時を羽の部分に乗せて出撃する。

だが、何も出来ない自分に歯がゆさを感じ、ついに自身もウィッチになる決意にする。

第４章　歓迎会で浮かれるとろくな目に遭わない！！

「それじゃあ、銀時の５０１統合戦闘航空団駐留を祝ってかんぱ～い！！」

と、明るい声で乾杯の音頭を取ったのはエーリカ・ハルトマンであった。彼女の声を合図に、みんなは手にしたグラスを持ち上げ、口々に乾杯と叫ぶ。

みんなはめいめいに歓迎会を楽しんでおり、その間に話題に持ち上がるのは、勿論この会の主役である銀時と美緒との勝負のことであった。

「いや～、まさかあの少佐が負けるとはなぁ～」

「うんうん。すごいよね～」

シャーリーとルッキーニはグラスに入ったジュースや果実酒を口にしながら、感極まった声音で会話する。

そんな二人の会話に美緒とミーナを除いた全員が参加する。

「そうだな。リベリオンの言葉に賛同するわけではないが、坂田の強さには目を見張る物があった。流石ネウロイを倒した男だと言うべきか」

「はぁ～、やっぱり坂本さんの言っていたことは本当だったんですね」

「それにしてもあの少佐相手に抜刀せずに倒すだなんて、凄いじゃないカ、なぁ～、サーニャ」

「・・・・・・うん」

と、口々に言葉を交わす中、ただ一人ペリーヌがエーリカと張り合うように、用意されたご馳走をぱくついている銀時を黙ったまま睨み付けていた。

（・・・・まさかあの坂本少佐を倒すなんて、許すまじ坂田銀時！！　私でさえ満足に触れない少佐の身体をこともあろうに腕で抱き留めるなんて～～～～！！　いつか寝首を掻いてやりますわ！！）

と、凄まじい怨念を身に纏いつつ、銀時の弱みを握ろうと観察するペリーヌであった。

そんなペリーヌの思惑とは裏腹に、銀時とエーリカは口いっぱいに食べ物を入れながら、

「あぐはぐばぐもぐ！！！　おい、そこの俺に付いてこれるなんて中々やるな！！」

「ぱくぱくぱくぱく！！　そっちこそ！！　中々いい食べっぷりじゃん！！　正直驚いたよ！！」

モゴモゴと咀嚼しつつ、お互いを褒めあっていた。

そんな銀時に怪我した足を庇いながら、美緒と介添えのミーナが近づいてきたので、銀時は食べるのをひとまず中断して、美緒たちの方へと視線をやる。

「？　どーしたんだ？　つーか、怪我大丈夫なのか？」

「あぁ、大丈夫だ。ちょっと受け身が悪かったのか、軽く捻ってしまっただけだ。なに、二～三日すれば治っているはずだ。銀時、貴様が気にすることではない。それよりも・・・・・・」

美緒は一旦言葉を句切り、スッと右手を銀時の方へと差し出した。

それを見た銀時は、

「？　何だその手は？」

「なに、私はまだまだ未熟だった。今日貴様と勝負してそれをまざまざと思い知らされた。そこでだ、銀時。私は貴様に感謝している。これは、その証の握手だ」

銀時は差し出された手と美緒の顔を交互に見やり、やがてフッと苦笑混じりの笑みを溢し、自分からその手を握り替えした。

「・・・・・・ま、あんま気にすんなよ。お前もなかなかの腕だったぜ。まぁ、俺の次の次くらいだけどな」

「フッ、すぐに追いついてみせるさ。その時はまた手合わせを頼むぞ、銀時」

と、捨て台詞を吐いて去っていく美緒とミーナは、ワイワイと騒ぐみんなの輪へと混じり、会話を楽しんだり飲んだり食べたりしていた。

銀時はしばらくそれを黙って見つめていたが、不意にグラスを持ったルッキーニとエーリカに手を引っ張られ半ば強制的に輪に加わり、飲めや歌えの騒ぎを深夜近くまで繰り広げるのであった。

ちなみにハメをはしゃぎすぎた銀時が嘔吐してしまうのは、また別の話である。

「う～い、っと。あ～、少し飲み過ぎたか・・・・・・。ったく、やっぱハメ外しすぎるもんじゃねぇーな」

と、酒の飲み過ぎでどす黒くさせた表情のまま呟きながら歩く銀時は、一人寂しく自室へと続く廊下を歩いていた。

一緒に騒いでいたストパンメンバーたちはというと、夜一緒に男と行動するのは危険だとか何とかいう理由で、ろくにこの基地の地理も知らない銀時に地図を渡して一人で行けと言い張り、今に至るというわけだ。

「ったく、今日来たばっかの俺に地図渡して一人で行けってあいつら鬼か。そんなに心配しなくても、あんなガキども襲うほど女に飢えてねぇーての。あいつらには俺がどんな風に見えてるんだこのヤロー」

ボリボリとボサボサの銀髪を掻きむしりながら、ブツブツと愚痴を言う銀時。

銀時は手渡された地図を見ながら、その時の出来事を思い出していた。

【回想】

歓迎会も終盤にさしかかった頃、エーリカたちと喋っていた銀時はミーナに声を掛けられた。勿論、銀時の部屋についてのことである。

「坂田くん。急で申し訳ないのだけれど、あなたの部屋割りのことで少し話があるんだけどいいかしら？」

「んぁ？　あぁ・・・・・・、部屋。別に良いぜ、俺はどこでも。寝られれば物置だろーが、某猫型ロボットが寝起きする押し入れだーろが」

「その例えは分からないけど・・・・・・。ちょうど、一つ開いている部屋を見つけたの。場所は整備室横の個室よ。少し狭いけどあなた一人なら大丈夫だと思うわ。夕方のうちに兵士たちに頼んで最低限の家具は配置してあるから、今日にでも寝られると思うわよ」

「マジでか。何だか悪いな。何から何までさせちまってよぉー」

「いいから。気にしないで下さい。私たちは約束を守っているだけですから」

と、妙に壁を意識したような言葉遣いのミーナであったが、鈍感である銀時はそれに気づかずにいた。それからミーナから受け取った地図を広げながらしばらく睨み合っていたが、

「あー、あのよぉー。悪いんだがよー、誰かここまで案内してくれねぇーか？」

と、銀時が発したその瞬間に、ピシリとその場の空気が固まった。

一定の間が開いた後、ストライクウイッチーズの面々が一斉に騒ぎ立てた。

「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！　ちょ、マジで！！！！」」」」」」」

「え、何？　そんなに叫ぶようなこと？　つか、何かショックなんだけど？　そんな叫ばれると」

と、全員に拒否するように叫ばれた銀時はショックを受けた表情を浮かべる。

すると、慌てて銀時を慰めるストパンメンバー。

「べ、別に銀時が嫌いだからじゃないよ！！　ね、ねぇ、みんな？」

エーリカがみんなにそう返すと、一斉にコクコクと頷き始める。

つーか、その必死さが返って不自然に見えた。

「あー、かえってそう取り繕われると逆に傷つくわぁー。まぁ、テメェらの気持ちも分かる。なんせ年頃の娘だもんな。だけどよぉー、俺としてはもう少しオブラートに包んで欲しかったな」

と、沈む気持ちを隠して、彼女たちに気にしていない風に言った。

ここでモロに出したら舐められるじゃねぇか。男の威厳を守るためにも、ここは虚勢をはらねぇとな・・・・・・。

「そ、そうなんだ。ごめんね、本当」

と、ストパンメンバーは口々に謝罪の言葉を口にしながら、そそくさと気まずそうに部屋を退出するのであった――――――。

「あ～、俺ってそんなに危ない奴なのか？　まぁ、最近女日照りだし、目が血走っていたのかもな。俺がもし女だったらたぶん避けるだろうし。うん、マジに避けるな」

意外と冷静に自己を分析する銀時であった。

しばらく物思いにふけながら廊下を歩いていると、不意に可愛らしい声が中庭の方から聞こえてきた。その声は微かだがはっきりと銀時の耳に聞こえてきて、その声の主の正体を突き止めたい衝動に駆られた銀時は声のする方へと忍び足で向かった。

自分がいた場所から中庭はたいして離れていなかったので、すぐ赴くことが出来た銀時は研ぎ澄まされた夜目を駆使し、声の主の場所を的確に突き止めた。

声の主はどうやら子供のようだ。

中庭の中央に立ち、何やら細い棒に跨って何かしているようだ。

その小さな姿は夜闇に紛れるようで、よく目をこらして見ないと

すぐに見失ってしまうほどだ。

「う、ん、う〝う・・・・・・、あっ」

呻き声を上げながら、何やらしている声の主に銀時は好奇心を抱いた。

ばれないように息を殺しながら、そぉ～と後ろに近づくと、

「うぉぉぉぉ！！！」

と、大声を出してその小さな身体に抱きついた。

すると・・・・・・。

「うひゃあああああ！！！」

と、案の定その声の主は大袈裟なくらいに驚き、手に持った細い棒のような物を地面に落とす。

銀時は地面に落ちた物へと視線を落とすと、そこに転がっていたのは古ぼけた箒であった。

「・・・・・・箒？　なんでこんなものが？」

銀時は訝しながらもその箒を手に取ろうと手を伸ばすと、

「そ、その箒には触るな！！！」

シュバッ！！！！！！

銀時の指が触れる前に素早い動きで拾い上げ、その箒を大事そうに背後へと回す。

「お、お前は今日ここにやって来た男だろ？　なんでこんなとこにいるんだ！？」

ジリジリと下がりながら銀時に質問する小さな影に、

「・・・・・・そういうテメェーこそこんな夜更けに何やってんだ？　こんな中庭の中央に立って箒に跨ってよぉ。あっ、そうか。お前そう言う趣味の奴か？　いるんだよなー、そういう特殊なプレイが好きな奴。あれか、ＤＶＤで観た魔法少女に憧れて箒に跨ったのか？　そんで気持ちいいって悦んでいたのか、このヤロー」

「ば、バカッ！！！　そんなわけないだろう！？　っていうか、何で初対面のお前にそんなこと言われなきゃいけないんだ！？　これはお前が考えているふしだらな行為ではなく、由緒ある行為なんだぞ！」

暗闇で分からないが恐らく顔面を真っ赤にしているのであろう。

その証拠に声がすごく上擦っていた。

「ふぅ～ん、由緒あるねぇ・・・・・・。つーことはお前の祖先の代から続くプレイなのか」

「だから、その発想から離れろって言ってんだろ！！！！」

あまりにしつこい銀時にキレる小さな影。

その叫び声を合図に暗闇に包まれた館内の電灯が灯り、ガヤガヤと騒がしくなった。

どうやら寝ていた全員が起きたようである。

「うぉい！！！　これやばくね！？　俺完全に怒られるよね！？って、何逃げてんだ！！」

と、銀時に背を向けて逃げようとするつなぎを着た少年？　の手を慌てて掴む。

「は、離せ！！　この天パー！！」

ジタバタと暴れる少年の手を更に強く握る銀時であったが、事もあろうに少年は暴挙に出たのである。
何と掴んでいた銀時の手を思い切り噛んだのだ。

ガブゥゥゥゥ！！！！

「いってぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

あまりの激痛に思わず掴んでいた手を離してしまい、その隙を狙って少年は銀時の拘束から逃れ、そのまま夜の闇へと身を窶すように逃げたのであった。

それと同時に銀時の元へと寝間着姿のみんなが集まってきた。

「こら！！　銀時、貴様何こんな夜更けに一人騒いでいる！！」

「うぇ！！　ちょ、悪気があったわけじゃないんだって！！　ここにそのガキがいて！！　こんくらいの！！」

と、抜き身の扶桑刀を手に持ち、怒りのオーラを身に纏いながら目の前に突っ立つ美緒に恐れを成し、慌てて銀時は弁解の言葉を口にするも、

「見え透いた嘘を吐くな！！　どこにそんな奴がいる！！　みんな、規律を乱す馬鹿者にお仕置きだ。武器を構えろ！！」

美緒の合図と共に、皆持参した武器を銀時に向かって構える。

「えっ、嘘だよね？　ねぇ、嘘って言ってよ！！　お母さん！！」

「誰が貴様の母か！！　総員攻撃開始！！」

「「「「「「「「「了解！！！！」」」」」」」」」

美緒の命令を合図に皆構えていた武器を銀時に向かって発射する。

ド、ドドォォォォン！！！！　ババババババ！！！！　バシュ！！

「くっそぉぉぉぉぉぉ！！！！！　もう俺絶対魔法少女に憧れる変態なんか相手にしねぇーーーーーー！！！！」

次々に飛んでくる弾を避けながら、銀時は空に向かって吼えたのであった。

第４章　歓迎会で浮かれるとろくな目に遭わない！！（後書き）

今日はここまでです。なんか・・・・・・、よくわからん話になったな！？

次は新キャラの正体が分かるかもです。その次から原作沿いに戻ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4885y/

銀パン～501戦闘航空団に白夜叉がやって来た場合～

2011年11月23日20時55分発行